

柱廊

淋しい柱廊は長く続き
大理石の冷たい手触りに力を奪われ
柱にくずおれて典雅な哀しさはふくれ
風は涼しく胸の中に、さや、さやと
これが春なのか、これが・・・

淋しい柱廊はどこまでも真直ぐに
その古風さの故、誰も歩きはしない
うち棄てられた冷たい空気は流れ
聞こえてくる弦楽合奏の幽かな響き
立ちすくむ骸骨の視線にも似ている

誰も私と歩いてはくれない
運命に甘んじて従うこのかすかな心に
誰が身を寄せるはずがあろう
何処までも真っ直ぐに単調なこの柱廊を
誰が静々と堪えて渡って行くはずがあろう

静寂の中で絶望という力にすがり
素足に伝わる冷やかな柱廊に
余儀なく立ち上がる私に
全ては無言かつ不動のまま
絶望のみを強いて、ただ続いている

(1982.5.14)